



つ
がづける、
がんばる！

ハガネカービー

「きゃああっ！」

「リボンちゃん、大丈夫っ？」

「……っ、は、はい！ カービイさんは」

「僕もまだ大丈夫だよ！」

妖精リボンが、被弾の衝撃で手を離してしまったカービイの体を急いで掴まえ直す。傷付いた体に激痛が走ったが、もはや気にならない。一方のカービイはリボンの状態を確認するとすぐに、クリスタルから変化した銃を構え直した。カービイはああ言ったが、大丈夫なわけがない。すでに爆撃を四回受けた体で、今の緑色のエネルギー弾の直撃。カービイがリボンに抱えられ……実質的にリボンを守る壁になっているという状況も鑑みれば、もう長くは持たないだろう。

「カービイさん、もう、一度……あの輪っかを……!!」

リボンはそう言いきる前に、全力で羽ばたいて対峙する巨大な敵、ゼロツターの頭上側に回り込んだ。カービイは、うん、と短く返事をする。ゼロツターの頭上に浮かぶ金色の輪にクリスタルの弾丸を雨霰と浴びせかける。数秒もかからず輪は碎け散り、ゼロツターが苦しむかのよう

に暴れ出した。

「はいっ！」

「リボンちゃん！ 今だよ、下に！」

上に向かっていた体を一気に下に向かわせる。方向転換の慣性にカービイの体重の分も加わり、羽根への負荷が大きい。でも、ここで投げ出すわけにはいかなかったし、投げ出すつもりもなかった。

——ゼロツ、あなたがリップルスターに来たあの日、私はあなた達を恐れて、ただひたすらに逃げることにしか考えなかった。でも、逃げた結果はもつともつと恐ろしいものだった。大切な故郷を、友達を失うのは、とつても怖くて、辛かった。だけど、そのおかげで分かったの。私にできること、私が、したいこと。だから、私は、絶対に、みんなを——

カービイの構えたクリスタルの銃が、ゼロツの尾とも根とも知れない弱点を捉えた。
「ゼロツ！ これで！ おしまいだよ！」

つづける、がんばる！

漆黒の霧の巨大な集合体、ファイナルスター。内部から見たそれは、一面が赤黒く染まっていた。右を向いても左を向いても赤と黒。どの方向も少し先には黒い霧のようなものが漂っていて、遠くまでは見えない。とても暗いような気がするのに近くはよく見える。改めて視線を